りびんぐらいぶず　令和3（2021）年6月第1号

救いの御名のほとけさま（上）

◆ご讃題

汝一心正念にして直ちに来たれ、
我よく汝を護らん

(Ref『散善義』七祖註釈版 p467)

◆はじめに

今から七年前、私と坊守は初めてブラジルの地に降り立ちました。

百年前に移民された日本人の二～五世の皆様が営まれる「南米仏教婦人大会」を支援するためだったのです。

ところが、千人規模の大会と聞いて失敗は許されません。思い余って当時行信教校の校長だった梯　實圓和上をお訊ねしました。

今お話するとすればこんなお話になりそうですがと

和上はにこにこしながら「お念仏は難しいものじゃない。これでいい、行ってらっしゃい」とおっしゃいました。

現地の総長は「是非来て下さい」とおっしゃいました。

「行け」というお声と**「来たれ」**というお声に安心して私は現地に渡りました。

忘れ得ない二河白道のエピソードでした。

◆『二河白道』、『聞即信』のみ教え

如来様の仰せの通りにお念仏すれば直ちに聞こえて下さるお名号こそは、**「汝一心正念にして直ちに<u>来たれ</u>、我よく汝を護らん」**(Ref 七註 p467)との如来様のお喚び声でした。

釈尊は**「すでにこの道あり、きみただ決定してこの道を尋ねて<u>行け</u>」**(Ref『信文類』註釈版 224)とおっしゃったのです。

来たれと**行け、お釈迦様の発遣と阿弥陀様の招喚のお喚び声**によって衆生は人生の二河白道を勇気付けられて歩めるのでした。

当時今生での和上の励ましは、今ではお浄土からのお喚び声になりました。

大会では、東日本復興支援歌『花は咲く』を現地の御門徒さん方と一緒に歌いました。

まっしろな雪道に　　春風香る
わたしは懐かしい　　あの街を想い出す
叶えたい夢もあった　変りたい自分もいた
いまはただ懐かしい　あの人を想い出す

誰かの歌が-聞こえる　　誰かを励ましてる
誰かの笑顔-が見える　悲しみの向う側に
花は花は花は咲く　いつか生まれる君に
花は花は花は咲く　私は何を残しただろう

これは、悲しみにうちひしがれた衆生が誰かの歌を聞いて、励まされ立ち上がりやがていつか生まれる君に何を残しただろうと自らに問いかける歌だと窺われます。

この歌の中に**「聞こえる」**という言葉がでて来ますね。**「聞こえる」とは、浄土真宗で大切な「お名号をお聞かせに与る」「聞名」を意味する言葉でしたよね。**

◆日本に伝わった大乗仏教が花開いたのは、法然上人がお念仏一つでお浄土に生まれることができるみ教えを開かれたときでした。

親鸞聖人は、法然上人のみ教えをお伝えしようとして、その本質は、如来様から回向された行信一つだと仰せになったのです。

南無阿弥陀仏の**「南無」とは「帰命」、「帰せよの命」**、仰せの通りに称えれば直ちに聞こえて下さる**「私の願いを聞いておくれ」**と本願のお心から切なる願いで喚び続けていて下さる如来様のお喚び声だったのです。

親鸞聖人の希有なお姿は、阿弥陀様から賜る信心とは、聞こえて下さる南無阿弥陀佛をお喚び声とお聞かせに与ることだと仰せになったことです。信心は「疑わない」一瞬ですからただ一度であり、信心獲得に至る道行きが見えませんが、聞くことといえば、繰り返し頂戴して終に喚び覚まされる三昧の**道行き**に恵まれます。

今生の経験世界でも如来さまから賜ったお念仏を仰せの通りに称えれば、お名号となって聞こえて下さる “ 聞名 ” を実感(聞遇と申します)することができます。

◆お東の香月院深励師のお弟子一蓮院秀存(1788～1860）師は、

◆**「声しあらば　あやふからじな　火に水の**
なかのほそみち　見ゆも見えずも」　とお歌いになりました。

「中の細道」とは、二河白道でしたよね。

信心は唯一度（信一念義）と承って参りましたが、「聞」といえば、喚び続けていて下さる（喚ばふ）お喚び声に終に喚び覚まされる三昧に恵まれるのでした。

◆妙好人の六連島のお軽さんは、

◆**「昨日聞くのも　今日又聞くも**
是非にこいとの　お喚び声」とお歌いになりました。有難いですね。

さすがに一蓮院秀存師は、学僧として、浄土真宗の「信一念義」のご法義に煩悶して、

◆**「勅命は　ただ一声と思ひしに**
今日もくる日も　弥陀のよび声」とお歌いになりました。

「今日も来る日も」の(三昧)がいいですね。

◆浄土真宗のご本尊

　そのお心を秋の一日人生の悩みを抱えて当院をお訪ね戴いた真摯な青年のお尋ねで誕生した仏教讃歌**「ふとあおぎみるおすがたは」**にお尋ねして見ます。

　青年は、秋の三連休になったら北小松へ行こうとだけ決めて行方も知らず足のむくままに当院をお訪ね下さいました。気がつけば、掲示板の法語に見入っているご自身に気が付かれ、そのときお寺のご本尊を拝んでみたいとの思いにかられたとおっしゃいました。

「どうぞどうぞ、お入り下さい。」と案内すると

青年は、本堂のご尊前に額ずき、それは丁寧に合掌礼拝されました。

　ところが、終って一言、

◆**「どういうご利益がありますか」**とお訊ねになったのです。

「あなたはご存じなかったかもしれませんが、本日、あなたを駅に降り立たしめ、当院に導かしめ、掲示板に見入らしめ、ご本尊を仰ぎたいと思わしめた大きなお力が働いていて下さったことでしょう。

その力に促されるようにあなたが一歩を踏み出された、そこに大きな意義があったのではないでしょうか。お姿も見えない法性法身の働きです。

　浄土真宗のご本尊は、その昔、インドの王舎城の韋提希夫人が人生の悩みを抱えてお釈迦様に救いを求められたのに対して、救いの法を説こうとお釈迦様がおっしゃるや否や阿弥陀如来が空中にお立ち遊ばした**住立空中尊**のお姿を象っています。

　方便法身のお姿こそは、お喚び声になって現れ給う阿弥陀様そのお方だったのです。

果たせるかな、悩める青年と別れた三ケ月後に讃歌**「ふと仰ぎ見るお姿は」**が現れ出て下さったのです。

◆ふと仰ぎみるおすがたは（詳細は楽譜に委ねます）　合掌。

（経緯）令和元年六月に教区親鸞聖人讃仰布教、翌令和二年十一月に高島組通安寺親鸞聖人報恩講、今年令和三年は、コロナ禍で一年飛んだ後、二年ぶりに教区親鸞聖人讃仰布教への出講と重ねてのご縁に遇わせて戴くことになりました。その都度筆を加えること夥しく、この度、改めての発行のご縁を戴くことになりました。合掌。

◆滋賀教区親鸞聖人讃仰布教特別布教大会御法話
◆令和二年、高島組通安寺親鸞聖人報恩講御法話
◆コンテンツには、「正覚寺　北小松」でヒットする「FC2」からお入り戴けます。

著作編集兼発行元（本願寺派　正覚寺内）〒520-0501 大津市北小松四五二番地
TEL077-596-0166、FAX077-596-0196 住職　堅田　玄宥